

白氏文集 三十八 琵琶行 (二)

加藤淳平

生來篤實なる官人白樂天なれば、左遷流謫の地にありても職務に精勤したるべし。閑職の司馬なれば、客人接待は重要な職務たりけむ。酒宴に歡を成さざるは、接待に疎漏ありしに似たれば、樂天、琵琶を弾じたる女に救はれたる思ひありしならむ。

琵琶行 (二)

琵琶行 (二)

忽聞水上琵琶聲

忽ち聞く 水上琵琶の聲

主人忘歸客不發

主人は歸るを忘れ 客發せず

尋聲暗問彈者誰

聲を尋ねて暗かに問ふ 彈く者は誰ぞと

琵琶聲停欲語遲

琵琶の聲停めど 語らんと欲するは遅く

移船相近邀相見

船を移して相近く 邀へて相見む

添酒迴燈重開宴

酒を添へ 燈火を迴らせ 重ねて宴を開く

千呼萬喚始出來

千呼萬喚 始めて出で來たる

猶抱琵琶半遮面

猶琵琶を抱きて 半ば面を遮ぎる

轉軸撥絃三兩聲

軸を轉め 絃を撥ひ 三兩聲

未成曲調先有情

未だ曲調を成さざるに 先ず情あり

絃絃掩抑聲聲思

絃絃の掩抑 聲聲の思ひ

似訴平生不得志

平生志を得ざるを 訴ふるに似たり

低眉信手續續彈

眉を低れ 手に信せ 續續と弾じ

說盡心中無限事

說き盡す 心中無限の事

輕攏慢撚抹復挑

輕く攏し 慢ろに撚じ 抹しまた挑す

初爲霓裳後綠腰

初めは霓裳を爲し 後は綠腰

大絃嘈嘈如急雨

大絃は嘈嘈 急雨の如く

小絃切切如私語

小絃は切切 私語の如し

嘈嘈切切錯雜彈

嘈嘈切切 錯雜して弾じ

大珠小珠落玉盤

大珠小珠 玉盤に落つ

(大意) すると水上から琵琶の音が聞こえて來た。主人は歸るのを忘れ、客人は出發しようとしなない。琵琶の音を尋ねて、小聲で誰が弾いてゐるのかと聞いた。琵琶の音は止んだが、なかなか返事をしようとしなない。船を近くに移し、こちらに迎へて誰かを知ろうとする。酒を追加注文し、燈火の向きを替へて、も一度酒宴を開かうとする。何回も呼ぶと漸く出て來た女は、琵琶を抱いて半分くらい顔を隠して居る。

琵琶の軸を締め、絃を二三回ばちではじいて音を出す。未だメロディにならないのにもう情趣がある。絃の抑制の効いた演奏や、歌ふ聲に籠もった思ひは、平生志を得ないことを訴へるかのやうだ。うつむいて手の赴くままに次から次へと琵琶を弾じ、心の中の無限の事を語り盡す。軽く絃を押さえた

りゆるやかにひねったりし、絃をつまんだり弾いたりする。初めは霓裳の曲、次は綠腰の曲（霓裳も綠腰も曲の名）を演奏する。大絃の大きな響きは急な雨の如く、小絃の切々とした響きは人の囁きのやう。大きな響きと切々とした響き、入り交じって弾けば、大きな珠と小さな珠が玉盤に轉げ落ちるやう。

（平成三十一年一月八日受附）